

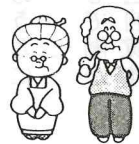
仙台教区報

カトリック仙台司教区事務所
〒980
仙台市青葉区本町1丁目2番12号

☎ 022(222)7371
FAX 022(222)7378

編集・発行 板垣 勲

福音の光によって みんなで考えよう 高齢化社会



日本の社会は歴史上かつて例を見ないほどの問題を抱えこんでいる。問題の種類が多様さと複雑さ、そして深刻さの点で解決は決して容易でないものばかりである。

国民の政治不信と政治離れ、権力者たちの利権に関わる政治スキャンダル。あるいは、自分中心の考え方をよしとして、とりあえず手ごたえあることに関心を持って生きることから出てくる家庭、教育、高齢化社会の問題。

世界に開かれた視野を持つことができにくい日本人の偏った世界観によって、日本が世界の一員として世界の中で責任を果たすべきであること（国際貢献）を真剣に考えられないなどの問題。

私たちが抱える問題は真剣に取り組もうとすればするほど重さを感じ、どれ一つも簡単に解決できない問題ばかりといった様相である。

その中で、日本の高齢化問題はマスコミ

が取り上げている以上に身近かで、多くの人の心に深刻で暗い影を投げかけている。

高齢化は他人ごとではない

いままで、日本で多くの人が慣れ親しんできた価値観の一つは、長生きすることは全ての人の喜びと願いであり、さらには人生の目的そのものであるかのような考え方である。それはほとんど無条件で人の幸せを認める尺度でもあった。しかし、現代は社会の価値観の変化によって、高齢者となることは必ずしも喜ばれないような風潮が出てきている。

家族であっても、他の人のことまで面倒を見切れないとの考え方が多くの人をむしばみ、その風潮を支えている。

高齢化社会の問題は人の命をどう見るかの問題でもある。誰もがいつかは老年期を迎えることになることを考えるならば、こ

れは私たち一人一人の問題でもある。特に多くの高齢者が現実には孤独の問題を抱えて悩み、苦しんでいることを考えると、これは他人ごととはいえない。

神は人を生かし支えている

一般的に、人間は若く元気なときは、自分にもいつか老化現象が現われ、老年期待の孤独に悩むことになるなどは気が廻らないといえる。しかし、肉体の衰えは人間に精神的にも、人付き合いの面でも想像以上に大きな変化、場合によっては打撃を与えることが知られている。

改めていうまでもなく、私たちは誰もが自分の力だけで生きているのではない。みことばに「力は若者の栄光。白髪は老人の尊厳」（箴言20・29）とあるが、これは人の命は神あつてのもの、私たちに語りかけているように思える。白髪は長生きを象徴するだけではなく、人間に希望を与える神の評価と期待が語られているのである。私たちは神の愛と慈しみによって生かされ、一生の間それぞれがふさわしい恵みと励ましを与えられて生きていく。

私たちは神に支えられて、人間として互いに支えあう生き方を大切にしたい。また神が私たちを受入れてくれたことに倣って老年期を過ごす方々を暖かく迎え共に生きることが、自分のためにも学びたい。

聖王聖いまま我に降だり

J・C・ロワゼール神父

6月7日の一本杉教会での堅信式に感激したのは、堅信を受けた方々だけではないようです。あの時、一人の二十歳ぐらいの青年はたまたま教会を訪ねてきました。日曜日のミサはここがはじめてで、その前に教会を訪ねたこともなかったそうです。

その時の青年の感激が手紙によって伝えられて来ました。彼のプライベートを守りながら、ここに紹介いたします。

「去る7日のミサは……私が初めて経験するミサでした。ミサにはもちろん感激しましたが、それ以上に人々の温かさみたいなものに、とても感激しました。

特に、私の隣に座っておられた婦人に親切にしてくださいまして、『聖霊いま我に降だり』を口ずさみながら、とうとう泣いてしまいました。私は来て良かったと心から思いました。

ところで、私は今月、実家へ帰り農業をします。仙台を去らねばなりません。残念です。残念です。これからは一本杉教会での思い出を胸に故郷の教会に学び、キリスト者として、多くの人を愛します……」

青年の隣に座っておられた婦人はだれだったかを知りません。けれどもその婦人の親切を通して、彼は人の愛を感じ、神の息吹に接したようです。なんと素晴らしいこ

とでしよう。

さて、青年の手紙を読んで驚いたことは彼が述べたことと、福音書の中にイエスさまと出会った人々について書いてあることと大変似ているということです。福音書には、まず探し求めている人がいて、イエスさまに近づきます。イエスさまは人を受入れます。そして人は大喜びで回心します（ザアカイの話↓ルカ19・1〜10参照）。

青年も何かを捜し求め教会に来ます。人の親切に接し、み言葉に心を開き、感激します。そして、「キリスト者として、多くの人を愛します」と回心の念を打ち明けたのです。福音のできごとはいま私たちのうちに再現されているわけです。

青年の隣におられた婦人は彼に与えた影響に気がついたかどうか分かりません。しかし、彼女を通してキリストのお働きがありました。私たちは肉眼でイエスさまの姿を見ることはできません。しかし、教会を通して、イエスさまはいま私たちのうちにいらっしゃるのです。

キリストは、一つの共同体を通して働かれます。私たちはそれをもっと自覚する必要がありますのではないのでしょうか。私たちが洗礼を受けて、聖体をいただいているのは、自己の救いのためだけではありません。それによって、私たちがキリストそのものになり、キリストのお働きを、いま継続する力をいただいているのです。

ひとつの悲劇

いまの世界の状況を見て、ある人がこう言いました。

「この世界はあまりの悲惨さに絶望している。しかし、クリスチャンは絶望する目すら持っていない。それが悲劇だ」。この言葉が私たちを指しているのではないことを願います。

私たちは大きな必要を見ました。開かれた機会を知っています。行動しないわけには行きません。

神がこれからも私たちを祝福してくださいませよう。この闇の時代にあって、私たちはともに神の言葉を伝える働きを行なってもらいましょう。

世界各地で聖書配布のために奉仕している団体（バイブルリーグ）の責任者が、とくに旧ソ連邦・中国の現状を思いながら語ってくれました。

信徒として教会の事業の責任を果たす

六十の手習ひ



田名部カトリック幼稚園
副園長 大場 繁夫

私の住むつ市は合併によって誕生した人口五万人の本州最北端の市である。旧田名部町地区には当園のほか四園、旧大湊町地区には大湊カトリック幼稚園のほか一園の幼稚園がある。

幼稚園の副園長を拝命して五年目に入りこの仕事にもようやく慣れてきたが「○○ちゃん、おはようございます」で私の一日は慌ただしく始まる。

着任は新学期で、登園したものの親と離れたくない子どもの泣き声と子供たちのにぎやかな声、そして保護者との対応と、細かい「神経が更に細くなったのではないか」と思われた。特に以前は「男の世界」にいた私は「子どもと女性の世界」への転身という事で、園児に恐怖心を起こさせるのではと心配したが、幼稚園バスの運転、庶務会計の仕事、園舎内外の清掃、整備等時間に追われ、園児と直接にかかわる時間が少ないのが幸いしてか拒否反応を起こす子どもも無く安堵した。

少産時代を迎え入園適齢児が減少の一途をたどる今日、園児の確保は園の存続を左

右するだけに、園児募集時期の悩みは大きく入園願書の受付に一喜一憂し、眠られぬ夜が続くのは閉口した。幼稚園に関わる以前には想像だにできなかっただけに、この現象には我ながら驚いている。

幸いに当園では入園適齢児の紹介、募集ポスターの掲示等、信徒の皆さんの協力を得て、徐々にではあるが園児の増加を見るに至っている。

振り返ってみますと、幼稚園創設期には教会・信徒が丸となり、当時の信徒は手弁当で労作に奉仕した。しかし、努力の甲斐あって幼稚園が一人歩き出来るようになった頃から幼稚園と信徒の隔絶が始まったような気がする。経営が軌道に乗った安心感から、やがて信徒の幼稚園への関心は薄れ、一方、幼稚園もそれを暗によしとしてきたのではなかっただろうか。信徒の一人として大いに反省しているところである。

司祭の高齢化、神学生の減少等、教勢の拡大が期待できない時代であればあるほど宣教の一端を担う幼稚園を含む学校等の教育機関に、信仰共同体の一員として信徒は改めて積極的な関心を寄せなければならぬのではないだろうか。「司祭は福音の宣教者として教えを授け、信徒は信仰についての教えを受ける」といった受身の時代はとっくの昔に終わったのである。

さて、幼児教育は本質において人間形成に大きな影響を持つ重要なものであり、よ

り良い保育を目指し常に「内容の充実」と「保育技術の向上」に務めなければならぬ。それでは副園長として何が出来るのかを考えると、旧態依然とした知識しか持ち合わせず幼児教育については皆無に等しいという反省から、いま一つ幼児のことを知るべく大学の門を叩いてみた。

「大卒の学士入学なら2種免許は通常2年のところ1年、1種免許は4年のところ2年で取得できます」と、大学側のいとも簡単そうな対応に気を良くし六十の手習ひよろしく教員免許の取得に取りかかった。

スクーリングでは娘と同年代の若い女性と机を並べての「お勉強」にはいささか気が恥ずかしい気がしないでもない。それよりも、理解するにはさほど苦労はしないものの記憶するには多大の労力を要した。今は「記憶してもすぐ忘れる」というお決まりのパターンを繰り返しつつも、どうにか2種免許をクリアー、残る1種免許も予定どおり今年度中には手にしたいものと机に向かってる次第である。



大場さんは定年退職後、信徒として教会の事業・幼稚園の責任を果たしている。今後、仙台教区でも教会、人の動きなどがいろいろに変わって行くことが予想される。一信徒が働き経験していることに時代の流れが見えています。

鑑 祝

おめでとうございます

今年、仙台教区では渡辺昭一神父（一関・千厩教会）が司祭叙階25周年の大きな節目を迎えた。司祭叙階記念日は7月8日で一関教会をはじめいろいろなところでお祝いの会が開かれた。

渡辺神父は肺結核で入院していた療養所でキリスト教に出席して受洗し、その後ストレプトマイシンによって命拾いし（本人談、その後、司祭叙階の恵みを受けた。何回か開かれた祝い会の中で療養仲間によって開かれたものが、参加者によると渡辺神父にとって、特別に感慨深いものであったようだ。なお、同神父は今年、還暦を迎えた。

朝 禱 △云△王国 △人△云△に
参 加 して

武田 恒彦（元寺小路教会）

去る6月12日から二泊三日にわたって福岡で開かれた朝禱会全国大会に仙台から14名が参加しました。私たちはジョリコール神父様の勧めで一日早く出発して、太宰府天満宮をゆっくり見学し、その後、自然に包まれた静かなところにある福岡黙想の家

に行きました。そこでは、黙想、ミサ、十字架の道行をし、翌日は早朝のミサ後、福岡サンスルピス大神学院、カルメル山の聖母修道院を訪ねて大会々場の福岡国際ホールに着きました。

今大会は「御霊によって進もう」（ガラテヤ5章25節）の標語のもとに全国から三百四十二名が参加しました。総会では事業・会計報告、会長公選、次回開催地の選定がありました。新会長は東京青山朝禱会の三木浩さん、次回は札幌開催が決まりました。夜は歓迎晩餐会があり楽しいひとときを過ごしました。

翌日は分科会のと、長崎二十六聖人記念館長・結城神父様の「キリシタンたちの祈り」と題する講演を聞き、この後はカテドラルで松永司教様ほか多数の神父様による荘厳で親しみのあるミサがありました。最終日は早天祈禱会があり、「イエスの祈り、すべての人を一つにしてしてください」と題する山元神父様の説教を聞き、朝食後それぞれに分散しました。

私たち仙台の仲間は福岡栄光キリスト教会を訪ねて礼拝し、長崎を目指して出発しました。宿泊先のホテルの向かいには仲町教会で、早朝ミサに与ることができました。ミサの形式は古いものが残されていてなつかしく感じられました。市内観光も雨に会うこともなく楽しみ、皆元気に仙台に帰りました。神に感謝。

カトリック研修センター 10月以降の企画



10月5日～10月9日 シルバーコース
「齢（よひ）豊かに」 25名
対象者 信徒・修道者・司祭
費用 35,000円

11月21日～11月23日
福音宣教コースⅢ 25名
「社会のただ中に生きる」
費用 18,000円

10月9日～10月12日
特別聖体奉仕者養成コース 25名
「信徒の教会奉仕とは」
費用 26,000円

※ 1, 2, 3月にも各種の企画があります。
※ 費用は食費・宿泊費込み



問合せ先 466 名古屋市昭和区広路町隼人30
日本カトリック研修センター ☎052-831-5037

司祭叙階

おめでとぅ

昨年4月に助祭に叙階されたグアダルペ外国宣教会のイグナシオ・M・バエス、エミリオ・フォルトゥル両師は聖母被昇天の祭日・8月15日にメキシコ同宣教会本部聖堂で司祭に叙階された。二人は東京カトリック神学院での勉強を終えてメキシコに帰国滞在中。叙階式は15名の受階者と多数の司祭が列席し、仙台教区からも含めて日本から多数の人が参列した。

なお、両司祭は日本での働きを希望しているが、現在のところ詳細は未定。

首藤神父、ブラジルから帰国が決まる

一九八八年に仙台教区から派遣されてブラジル・サンタレン教区で働いていた首藤神父が今年中に帰国することになった。

同神父はサンタレン教区と契約を結んで働いていたが、世界に名だたるアマゾン河流域にある同地は、日本から行って働くのが困難だと当初予想された以上に厳しい環境だったようである。そのため、同神父がこのままサンタレン教区で働くことは同神父の健康上思わしくないとする、佐藤司祭の判断によって契約期間を短くして帰国す

ることになった。

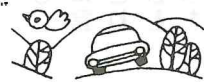
首藤神父は帰国後は静養の後、ブラジルでの経験を生かし、来年度から教区で信徒養成などの働きを新たに始めたいと意欲を燃やしている。

聖書のことば

旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました。

(ヘブライ13・2)

「知っている人ならばいいけれど知らない人はお断り」と私たちは他の人に自分の心を閉じることがあります。それによって、私たちは自分の知らない他の世界に心を閉ざし、自分自身をよそ者にしてしまします。受入れなかった人が他人ではなく、自分であったと気づいたとき私たちはどうすればいいのでしょうか。知らずして天使をも追い出してしまうとすれば、私たちは神の恵みも門前払いしてしまうのでしょうか。



福祉活動の新たな動きが始まる

福島県カトリック連絡協議会・福祉部では今年2月に県内教会の福祉活動について実情把握を兼ねたアンケート調査を行なった。調査のおもな目的は教会の福祉活動の組織化と活発化をはかることである。

これに先立ち、同福祉部では5月に総会を開き福祉部の活動目的を次のように確認した。福島県連福祉部は

「福音の精神にもとづき、福祉活動をと おして社会の福音化をはかる」。

このため、各教会に福祉部員を置き、情報交換をする。今後4か月毎に各教会が活動報告を出しあい、必要に応じて研修会などを開く。

なお、活動報告の第1目目が県内8教会から、福祉部長の遠藤峯雄(小名浜教会)さんのところに届けられ、そのまとめが8月に出された。それによると、各教会では多くの課題をかかえながらも、福祉施設訪問、点訳奉仕、廃品回収などの活動が行なわれていることが見てとれる。

また、福祉部では活動を教会に限定せずいわき市「ふれあい・ふくし塾」への参加など、活動の広がりを目指している。そのために、信徒の福祉活動への関心を高めること、現在、福祉活動をしていない教会も前向きに話し合うことを呼びかけている。

「家庭と信仰」

景山 あき子(援助修道会)

私は今までずっと信仰教育に携わってきまして、家庭は信仰教育の大きな場であると思っております。ですから、家庭で信仰の根をもらい、少し大きくしてもらってから翼をもらってみんなが飛んでいけるように、家庭は子供たちを育てている時期に、信仰の根と翼の二つを考えて与えなければならぬのです。

信仰を考えてみますと、信仰は出来上がったものというよりも、伝えられてきたものです。伝えられたものだから、どこかで誰かが信仰を持って生きていたということとです。私たちは生きていたものをいただいて、生かされているというわけです。それで、私たちも生きて次へ伝えていくのです。教会に来てたくさんのことを勉強するということがよりも、生きることを習い、支えられて、生きていくのです。みんなと一緒に生きていき、また新しい生命を伝えていくということが福音宣教ではないかと思えます。

根本的にイエス様がくださった福音は生きる恵みでしょう。洗礼を受け、堅信を受け、ご聖体をいただき、赦しをいただくこ

とのすべては生きること繋がつているのです。その生がキリストに生かされるのです。だから、神様の命で、永遠の命に生かされているということに繋がっている。それが福音です。(中略)

教会の秘跡はすべて生きるためにあるのです。私たちは生きるために秘跡をいただいているのです。そして、イエス様のなさったことを今は教会がしているわけです。「私のやったことを続けてやりなさい」と言ってイエス様がご自分で私たちに聖霊を送ってくださいました。聖霊において復活したキリストはきょうも私たちと一緒にいてくださるのです。(中略)

家庭には嬉しいこと、困っていること、悲しいことがいっぱいあります。私たちは家庭の中で、どういうふうに生き、それを乗り越えて行くか。どういうふうに神様と出会うか。神様とともに生きていくかということを知るのは難しいでしょうか。家庭にこそイエス様がいらっしゃるのです。

会社員は職場ではいい顔をしていても、家に帰ったら、いろいろなことを家族に言いたくなります。家庭は私たち一人ひとりにとって大切なところです。家庭にも苦しみがあります。どういうふうな苦しみを乗り越えていくか、どういうふうな神様とともに行くか。そこから福音が私の中に入って私が段々キリスト化され、そして新しい家庭が出来る。

それから私たちには家庭ぐるみのお友だちも必要です。そういう人たちと一緒に、祈り互いに助け合い、苦しみを背負っていくことが出来るのです。そうやりながら、福音宣教が地についたもの、根の張るものとしてできるのではないのでしょうか。素敵なことだと思えます。

永遠の命をいただくためには友だちが必要。友だちをつくりなさい」とイエス様は言いました。本当に良い友だちはイエス・キリスト様です。その友だちを持たなければ永遠の命をいただけないのです。

私たちは一人では何もできないし、家庭を通さないといろいろなことが出来ないのです。だから、私たちが家庭を通して信仰を伝えるという時に、本当にいい友だちをつくっていく。それから、私たちの一番良い友だちのイエス・キリスト様と相談しながら、どんな困難でも切り抜けていく。キリストだったらどうなさるか「イエス様、どうぞお願いします。教えてください。どうしたら、あなたが喜んでくださるでしょうか」と相談しながらやっていくことではないかと思えます。イエス様と友達になれば、福音による仲間もキリストを中心にして増えていきます。家庭も福音に生かされていきます。イエス様が家庭のお友だちになりますように！

第20回カトリック宮城県大会
基調講演より

窓を開ければ

東チモールのこと (2)

「仙台東チモールの会」羽倉 正人

私たちは毎年、秋に東チモールの人を招いて全国スピーキングツアーを行なってきた。今年で、7回目くらいになるのだろうか。仙台でもこのような形で、8人の東チモール人と直接顔を合わせてお話を聞かせてもらい、交流することができた。北と南の関係とか、植民地の問題、人権侵害とか日本の責任というような「理念」上の問いかけだけでなく、「顔の見える、心の通い合う」関係をとおしての親密な隣人同志の共正の在り方、「汝の隣人を愛する」仕方として「東チモール問題」を我が身のうちに感じとりたい気持ちが多く、支援者のなかにあつただろうからだと思う。少なくとも僕はそうであった。人間関係の喜怒哀楽の形で「世界」を考えたいという気持ちが僕のなかにはずっとある。

★

今年も東チモールの人がやって来る。仙台では11月20日(金)に141ビル・5Fセミナーホールで集会を予定している。来仙9人目の東チモール人は、アニー・イナシオさんという22才の女性です。

カトリックの若い人たちにもお話を聞いていただけたらと思う。

カルメル山の聖母の祝日に

核廃絶と平和を祈る

荒賀 久仁夫 (元寺小路教会)

7月16日はカルメル山聖母の祝日。二五一年のこの日にカルメル山で、聖母が聖シモン・ストックに出現された。また、この日は人類の歴史の中で決して忘れてはならない出来事が起こった日でもある。

第二次世界大戦も終わりに近づいた一九四五年7月16日、皮肉にも「三位一体」と名付けられた世界初の実験用原子爆弾がニューメキシコのワータイム山上で核爆発を起こした。この爆発は人類が核の時代に突入したしるしとなり、三週間後の8月6日には広島で9日には長崎と、生きた人間の上に投下されたのである。大戦後も数多くの原水爆実験が世界各地で行なわれて地球の生態系に重大な影響を及ぼし、核実験が行なわれる地域の人々は常に放射能の危険にさらされている。

この7月16日に人類最初の原爆投下という罪の赦しを願ひ、カルメル山の聖母の取り次ぎによって神のご保護と導きを祈ることを呼びかけているアメリカのシスターがいる。コングレガシオン・ド・ノートルダム会のシスター・パトリシア・マッカーシーがその人である。彼女は一九九〇年から毎年7月16日にニューメキシコの砂漠の真

中にある爆心地で、一日中ロザリオの祈りを捧げミサに与る。

今年はこの日に先駆けて来日し、7月1日に福島市公会堂で、一般市民と桜の聖母短大の学生を前に「今、平和への女性の使命」と題する講演を行なった。シスター今泉ヒナ子の通訳を介して、講演の中でシスターパトリシアは暴力によっては決して平和はつくれない、しかし現代の社会は核兵器を始めとする暴力にみちた社会であり、中でも世界中で多くの人々が飢えていることこそ最大の暴力である、と強調した。

そして、非暴力によって平和をつくらうとしたガンジーらの言葉を引用しながら、真の平和を達成するには女性の行動が不可欠であること、また真剣に人の話を聞くのは若い人であるとして、これからの社会を担う世代への期待をあらわした。

この後、カトリック正義と平和仙台協議会ではシスターの呼びかけに応え、7月16日夜に北仙台教会で「核廃絶と平和を祈るミサとロザリオ」の集いを開催。日頃、平和のために働いている信徒、聖職者たちが平和のために心を一つにして祈る、ということの大切さを改めて実感した。今後も何らかの形で、7月16日の祈りの輪が広がっていくことを願いたい。



陽の光

武内 洋子 (東仙台教会)

信 仰 雑 感



太陽が空の果てから果てまで廻って人を照らすように、まことの太陽である「主」よ。私は思う。教会だけが神の賜物を独占しているわけではない。私の廻りのあちこちでは、いいことを考えついて黙々といいことをやっている人がいる。

それは民間レベルで、諸宗教を信じる人の中……あちこちで。キリストの息吹は、もしかすると教会の屋根の上を通りすぎて一軒一軒の軒下に、あえて「神さま」と叫ばない人々の中に吹き込まれているのかも知れない。

キリストの弟子、仲間が教会関係ではないところまで生き生きとしているのかも。外へ出かけていって人々の素朴さ、ぬくもりに出会ったとき「ああ、ここにもキリストがおられる」とうれしくなる。

きのうの新聞に「スポーツ大会ではよく『健全な精神は健全な肉体に宿る』とあいさつされるが、それなら障害者はみな不良なのか……。このことわざを、作者の詩人ユウエナリスのおもわくとはまったく違う解釈で私たちは捉えていると、全国から手紙が寄せられている。ユウエナリスの原文はこうだ。『こう願うがよい。健全な

身体に健全な心を宿らせてくれ。死の恐怖にも平然たる剛毅な精神を与えよ。人生の最後を自然の贈物として受け取れる心を願え。今、私が諸君にすすめたものは、諸君が自分で自分に与え得るものなのだ。』つまり、そのように願ひ祈りなさいとすすめた詩で「宿る」と断定した詩ではない。体は強健だが考え方に問題のある人々はローマの昔からいたわけだ、と結んである」(9月4日朝日新聞・天声人語)

これを読んで、私は難病とつき合いながら明るく生きていく友達を思った。

点字で読書しまくっていた彼女は、つい最近、指先の感覚がなくなった。それで、新たな情報はテープや朗読奉仕者による耳からのものに頼ることになってしまった。

でも、彼女の精神は全く健全で、ジョークを飛ばし、歌を歌い、おしゃべりは鳥のさえずりのようだ。先週、彼女はミサで答唱詩編をみんなの前で、神の前で歌った。味わい深い彼女の声は今までの苦しみ、悲しみを全部、神に向かってつつしみ深く報告しているようだった。

私はといえば、やや健全な体に、時折不健全な精神が宿る。そんな時、まことの太陽の光にあたりたいと願う。私は思う。今日こうして5人の子供を授かり、何とか日を暮らしていけるのは私の力ではない。たまたま、こんな私のところにも、陽の光が注がれたからなのだ。

陽かげにいる人には、その時陽なたにいる者が反射鏡になって光を照らしてあげられたら……。私が陽かげにいる時は、陽であるあなたが遊びに来てくれますように。

二 情報

教区召命促進キャンペーン

9月6日に、第2回目のキャンペーンが行なわれた。「神学生の声」も各地に届けられ召命への関心が喚起された。

福島カトリックの集い

郡山市郊外で9月15日に「家庭」をテーマに信徒が集う。佐藤司教も出席。

開校百周年

盛岡白百合学園は10月に開校百周年を祝う。感謝ミサは26日、記念式典は27日。

編 集 後 期

世界の動きは慌ただしく、目が回りそう。どこの国を見ても安定とは縁がないかのようだ▼今年台風、ハリケーンの話が多い。自然現象の不安定も相変わらずで、人の心は落ち着くことがない▼台風はいやだが、台風には過ぎ去った後のさわやかさということがある。さて、私たちの心はどんな時さわやかさを感じるのだろうか。

